

わたしの居場所

北の大地で平和運動60年



木造の小屋で監視に詰める二部(左)と浦舟三郎(右)。時折大気をつんざくような大砲の音が響くが、そのほかは2人の間に静かな時間が過ぎていく(北海道別海町)

生活楽しみ関し続ける

なに、明るくつらして
いる。たやかな関いを映画
にしたとずっと思ってきた
ました」と言う。

現在、演習場内の民有地に
は、川瀬の関いに合流した浦
のほかに、彫刻家の二部(左)と
詩人の倉谷あみ(右)夫妻が
住んでいる。二部は小樽市生
まれ。北海道教育大附設校を
卒業後、美術教師を経て、30
歳から彫刻家として生きてき
た。

「大学時代の原野に、平和
盛盛り50年記念の彫刻を作っ
てくれと頼まれ、何年か夏の
間だけ矢別別に来たら、
住み着かないかという話にな
った。彫刻の仕事は人魚離れ
た所でもやるものだし、妻も賛
成してくれたので移ってきた」

2017年に知床から移住
してきた夫妻が暮らすのは、
牛舎だった建物を改修した
家。2階を美術館にして、共
同制作した詩画集や二部の彫
刻作品などを展示、一般に開

演習場内で心の底からこの
場所で生きていきたいと思っ
たよになれば、長続きしな
いんじゃないかな」と二部は
話す。

この日の演習は午後4時半
まで続き、計98発の射撃があ
ったことを、監視小屋では確
認した。

「一発射撃のたびに、間違っ
て自分の家に落ちないかとい
う恐怖感がある。肌を感する

憲法9条、今も屋根に

矢別別の平和運動の象徴的な存在だっ
たのが、2009年に82歳で死去するまで、
この地に住み続けた川瀬(左)と二部だ。
川瀬は戦前、岐阜県の養蚕農家に生ま
れ、26歳で入植。ほとんどの農家が、旧
防衛施設庁の買収工作に悩んで離農する
中で、妻の普美子(ふみこ、1996年に69
歳で死去)とともに、最期まで矢別別に
踏みとどまった。

ここで暮らす浦舟三郎ら多くの人が、
二部の飾らない人柄、人間的魅力が運動
の大きな力になったと証言する。
平和盛開り大会の際、宿泊所となる倉
庫の屋根には、二部が書いた憲法前文と
9条などの文字を今も見ることができ

11 演習場内の監視小屋

2月1日午前8時31分、日
米共同演習実施中の北海道・
陸上自衛隊矢別演習場に、
大気をつんざくような音が響
いた。15分りゅう機関の
発射が射撃された瞬間だ。20
秒間隔で発射され鈍い轟音
も聞こえてくる。

「弾まで4秒だから射
撃は13秒くらいかな。轟音で
最初は轟音音が聞こえないん
だよ」



演習場の真ん中、砲弾が飛
ぶコースのそばに立つ木造の
小屋で、監視に詰めている浦
舟三郎(左)が教えてくれた。
浦は和歌山県生まれ。貨物
船の船長だった1988年、
イラン・イラク戦争中のペル
シヤ湾に行く仕事を断って退
職。翌年、妻と二人でここに
移住してきた。

浦には戦時中、米軍の空襲
で大勢の友人や知人宅をた
げられた経験がある。「米軍と朝鮮軍
往復する貨物船に乗っていた
時代に、矢別別の平和運動を

知ったのが、移住の動機に
なった。2009年に妻を病
気で亡くした後、監視小屋
から約1kmの民有地にある家
で一人暮らしを続けている。

北海道東部、根釧原野の中
央に広がる矢別演習場は、
総面積約1万7千坪。自衛隊
では最大規模の演習場だ。
戦後、国の開発計画に基づ
き開拓が進んでいた場所に、
演習場設置が決まったのは1
962年。しかし、故川瀬

二部夫妻が苦勞して開い
た土地に「住みたい」と用地買
取に応じなかった。60年近く
運動の原動力だ。
民有地を同じように演習場
が設置されたが、川瀬らは労
組や全国の反戦運動と連携
し、買収を拒否し続けた。65
年から毎年8月に平和盛開り
大会を開催。憲法9条まつり
どころに自衛隊は憲法違反
「緑の園主を砲弾で荒らすな
」と訴える。

ドキュメンタリー映画「矢
別物語 北の大地からのメ



ドキュメンタリー映画「矢別物語」の映画監督、山本洋子(手前)とスタッフ。倉庫の屋根には憲法前文と9条が書かれている(北海道別海町)

ソーション」を撮影中の映画監
督、山本洋子(右)は、80年代
半ばに初めて矢別を訪れ、
人々の熱い思いを表現し驚い
た。「戦争か平和かの数割線

放している。
「ここでは拳を振り上げる
だけでは足りない。米兵10
度以下になる厳しい冬や、孤
独に耐えていくためには、生

身の危険は、戦争へ向かう時
代と二本道とつながっている
と感じます」。移住から日が
浅い二部は、恐怖を筆頭に表
明する。

一方、浦は矢別が沖縄の
問題と共通している指摘す
る。1984年に陸上自衛隊
と在沖米海兵隊による日米
共同演習が行われて以来、矢
別では米軍の演習が日常的
になった。入り口に銃撃テ
ロが敷設されるなど備も格
段に強化される。今回は最遠
られたが、米軍普天間飛行場
所属の輸送機オスプレイの訓
練も予定されていた。

「日米地位協定が大きな問
題です。終戦後の占領時代と
同じ状況ですよ。沖縄のよう
に米軍が事故を起こしたら、
どんな目に遭うのか。ここで
発信していかないとかならな
いと感じます」と浦。

浦と二部によれば、現在は
退去を求め強い圧力や露骨
な嫌がらせはない。住民は
変わっても、60年近く続い
ている運動の魂みがそこにあ
る。

今後の運動について尋ねる
と浦は「憲法9条の精神が
あれば大丈夫。二部は「こ
この暮らしの楽しさを伝えら
れれば、きこころつながると
期待感を込めた。

山本が7年がかりで撮影し
た映画は、6月ごろ完成予定
だ。義父は「日巨塔」「戦
争と人間」などで知られる監
督の故山本薩夫。「難しい映
画ほどやさしく作れ、どう
おやさんの教えにない、
楽しくて、見終わった後はこ
ういう平和運動もいかなと思
ってもらえるような映画にし
たい」

(敬称略、文・花珠樹 写
真・堀誠一 共同通信)